

平成 3 0 年 度

芸術文化学部 芸術文化学科

推薦入試・帰国生徒入試・社会人入試

小 論 文

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。
- 2 問題は、全部で4ページ、解答用紙は1枚、下書用紙は1枚である。試験開始の合図があったから確認すること。
なお、試験問題に文字などの印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れなどがあつた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- 3 試験開始後に、解答用紙の指定欄に受験番号を算用数字で記入すること。
氏名を書いてはいけない。
- 4 解答は、すべて解答用紙に記入すること。
- 5 配付された問題冊子および下書用紙は、試験終了後、持ち帰ること。

| |
|----------|
| 実施年月日 |
| 29.11.29 |
| 富山大学 |

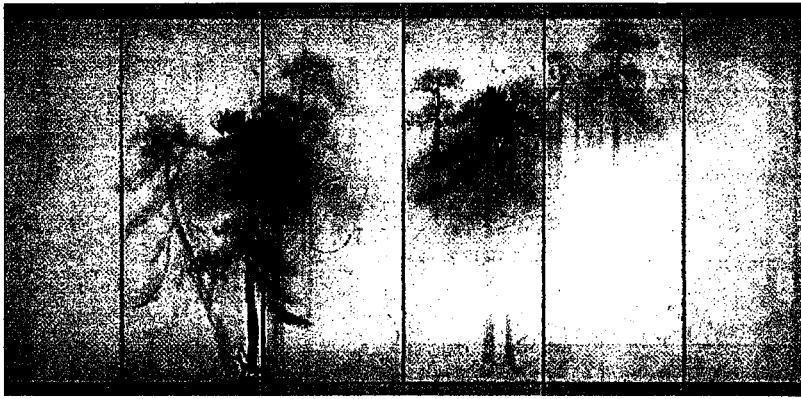
下書用紙

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

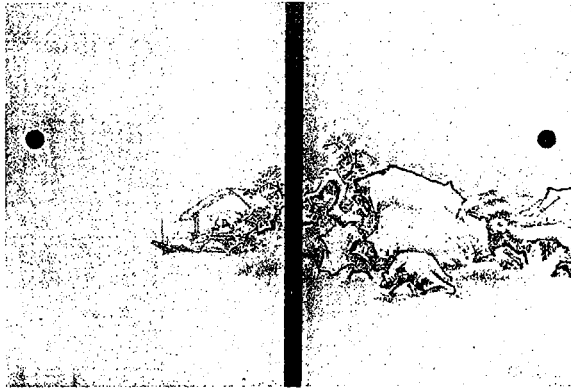
千利休の朝顔をめぐるエピソードは、比較的よく知られた話であろう。利休は珍しい種類の朝顔を栽培して評判を呼んでいた。その評判を聞いた秀吉が実際に朝顔を見てみたいと望んだので、利休は秀吉を自分の邸やしきに招く。ところがその当日の朝、利休は庭に咲いていた朝顔の花を全部摘み取らせてしまった。やって来た秀吉は、期待を裏切られて、当然不機嫌になる。しかしかたわらの茶室に招じ入れられると、その床の間に一輪、見事な朝顔が活いけられていた。それを見て秀吉は大いに満足したという。

このエピソードに、美に対する利休の考えがよく示されている。庭一面に咲いた朝顔の花も、むろんそれなりに魅力的な光景であろう。しかし利休は、その美しさを敢あえて犠牲にして、床の間のただ一点にすべてを凝縮させた。一輪の花の美しさを際立たせるためには、それ以外の花の存在は不要である。いやそれどころか邪魔になるとさえ言えるかもしれない。邪魔なもの、余計なものを切り捨てるところに利休の美は成立する。

だが庭の花を摘み取らせたことの意味は、余計なもの排除という点にだけ尽きるものではない。花のない庭というのは、それ自体美の世界を構成する重要な役割を持っている。期待に満ちてやって来た秀吉は、一輪の花もない庭を見て失望し、不満を覚えたであろう。茶室に入ったときも、その不満は続いていたはずである。そのような状態で床の花と対面したとすれば、何もなしに直接花と向き合ったときと較くらべて、不満があつた分だけ驚きは大きく、印象もそれだけ強烈なもの



長谷川等伯《松林図》(部分) 安土桃山時代、東京国立博物館蔵



狩野探幽《山水図》1641年、大徳寺蔵

なつたであろう。利休はそこまで計算していたのではなかつたらうか。つまり床の間の花は、庭の花の不在によっていっそう引き立てられる。このような美の世界を仮りに一幅の絵画に仕立てるとすれば、画面の中央に花を置くだけでは不充分であり、一方に花が、そして他方に何も無い空間が広がるという構図になるであろう。日本の水墨画における余白と呼ばれるものが、まさしくそのような空間である。

この「余白」という言葉は、英語やフランス語には訳しにくい。西洋の油絵では、風景画でも静物画でも、画面は隅々まで塗られるのが本来であり、何も描かれていない部分があるとすれば、それは単に未完成に過ぎないからである。だが例えば長谷川等伯の《松林図》においては、強い筆づかいの濃墨の松や靄もやのなかに消えて行くような薄墨の松がつくり出す樹木の群のあいだに、何も無い空間が置かれることによって画面に神秘的な奥行きが生じ、空間自体にも幽遠な雰囲気漂う。また、大徳寺の方丈に探幽が描いた《山水図》では、何も無い広々とした余白の空間が、あたかも画

面の主役であるかのように見る者に迫って来る。

もともと余計なものを、二義的なものを一切排除するというのは、日本の美意識の一つの大きな特色である。京都御所の紫宸殿（注1）の庭は、西欧の宮殿庭園に見られるような花壇や彫像や噴水はまったくなく、ただ一面に白い砂礫を敷きつめただけの清浄な空間であり、あらゆる装飾や彩色を拒否した簡素な白木造りの伊勢神宮は、今日に至るまでもとのままのかたちで受け継がれ、生き続けている。伊勢神宮の式年造替（遷宮）（注2）が始まったのは紀元七世紀後半のこととされており、建物の原型もほぼその頃に成立したと考えられているが、当時日本にはすでに、大陸からもたらされた仏教が一世紀以上の歴史を経て定着しており、それにもなつて「青丹よし奈良の都」と言われる通り、多彩な仏教寺院建築も、奈良をはじめ日本の各地に建てられていた。仏教寺院の場合、建築工法も、柱を礎石の上に置き、屋根は瓦葺きという進んだやり方で、掘立柱、萱葺きの伊勢神宮より、保存性もはるかに高い（それゆえに、伊勢神宮は二十年ごとの建て替えが必要となる）。伊勢神宮でも、周囲にめぐらされた高欄（注3）の部分などに仏教建築の影響が認められるから、その造営にあたった工匠たちが大陸渡来の新技術を知らなかつたわけではない。だがそれにもかかわらず、日本人は敢えて古い、簡素な様式を選び取り、しかもそれを千三百年以上にわたって保ち続けた。そこには、余計なものを拒否するという美意識——信仰と深く結びついた美意識——が一貫して流れていると言つてよいであろう。

高階秀爾『日本人にとって美しさとは何か』から

(注1) 紫宸殿・・・平安京内裏の正殿。(『広辞苑』第六版)

(注2) 式年造替・・・神社で、定期的に神殿の全部または一部をつくり替えること。式年遷宮(せんぐう)。(『デジタル大辞泉』)

(注3) 高欄・・・宮殿・神殿などのまわりや、橋・廊下などの両側につけた欄干。(『デジタル大辞泉』)

(本文は原文のままである。ただし注を付した。)

問一 筆者が指摘している日本の美意識について一五〇字程度で説明しなさい。

問二 筆者の見解にふれつつ、あなたが考える「美しさ」について、これまで経験したり学習した事例をあげて、六〇〇字程度で述べなさい。

